

## ビワ新品種 ‘麗月’

寺井理治<sup>1</sup>・稗圃直史・福田伸二・長門 潤<sup>2</sup>・佐藤義彦<sup>3</sup>・浅田謙介<sup>4</sup>・  
森田 昭<sup>4</sup>・中尾 敬<sup>5</sup>・富永由紀子<sup>6</sup>・一瀬 至<sup>4</sup>・吉田俊雄<sup>4</sup>・橋本基之<sup>4</sup>

### New Loquat Cultivar ‘Reigetsu’

Osamu TERAJ, Naofumi HIEHATA, Shinji FUKUDA, Jun NAGATO, Yoshihiko SATO,  
Kensuke ASADA, Akira MORITA, Takashi NAKAO, Yukiko TOMINAGA, Itaru ICHINOSE,  
Toshio YOSHIDA and Motoyuki HASHIMOTO

#### 緒 言

ビワの経済栽培品種は以前から‘茂木’および‘田中’の2大品種で占められ、しかも1産地1品種の産地形態であるため、特に収穫・調製への労力集中により経営規模拡大が困難で、栽培面積、生産量ともほとんど増加していない。したがって、摘果・袋掛けや収穫・調製に要する労力を分散することで経営規模拡大を促し、生産拡大を図るためには、成熟期の異なる多様な品種を育成する必要がある。そこで、長崎県果樹試験場では1953年

本研究は農林水産省指定試験事業により得られた成果である。

<sup>1</sup> 現在：長崎県農業会議

<sup>2</sup> 現在：長崎県農林部

<sup>3</sup> 現在：独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所

<sup>4</sup> 元長崎県果樹試験場

<sup>5</sup> 現在：長崎県総合農林試験場

<sup>6</sup> 現在：長崎県科学技術振興局

よりビワの育種を実施し、1976年に‘長崎早生’（村松ら、1976）を育成した。また、1973年からは農林水産省指定試験事業のびわ育種指定試験地としてビワ育種に取り組み、これまでに、‘白茂木’（一瀬ら、1982）、‘涼風’、‘陽玉’（寺井ら、2001）および‘涼峰’（根角ら、2006）を育成してきた。

ビワは幼果期が厳寒期にあたり幼果が寒害を被りやすいため、安定生産が困難な果樹である。そのため、生産安定のための方策として1980年代後半から施設栽培が始まり、‘長崎早生’がその主力品種となっている。しかし、‘長崎早生’のみの栽培では収穫期に労力が集中するため、規模拡大のためには‘長崎早生’とは収穫期が異なり労力分散が可能となる品種が不可欠である。さらに、新たな需要の開発と高付加価値商品開発のためには、果実形質が‘長崎早生’とは異なった品種の育成が求められている。

長崎県果樹試験場において、果実が大きく食味が優れ、‘長崎早生’に続く早生の新品

種育成を目標に交雑を行った結果，‘麗月’を育成したので，その育成経過および特性の概要を報告する。

## 育成経過

1976年，‘茂木’の枝変わりである早生品種の‘森尾早生’に，中国導入品種で良食味品種の‘広東’の花粉を交配した（第1図）。翌年，獲得した交雑種子を播種し，ガラス室内において実生を養成した。1980年に個体番号‘76-317’を付して育種圃場に定植した。早生種で，果肉がち密で軟らかく，糖度が高い等，果実品質が優れていたことから，1988年に注目個体として一次選抜した。しかし，‘76-317’は露地栽培ではそばかす症および裂果の発生が多いとともに，幼果が寒害を受けやすく安定生産は困難であった。そこで，施設栽培適応性を検討したところ，果皮障害の発生が少なく品質が優れていることが判明したため，1996年からビワ第2回系統適応性検定試験に‘ビワ長崎7号’の系統番号を付して供試し，施設栽培用系統として地域適応性の検討を開始した。その結果，2001年7月に開催された平成13年度果樹系統適応性・特性検定試験成績検討会（常緑果樹）において，その優秀性が確認され，新品種候補にふさわしいと認められた。育成場所のある長崎県では，同年9月に開催された農林業技術連絡会議において，本系統を新品種候補とすることが承認された。さらに，2002年2月の農林水産省果樹試験研究推進会議において新品種候補とすることが決定された。2002年9月3日付けで農林水産省育成農作物新品種命名登録規定に基づき，‘麗月’と命名，「びわ農林4号」として登録された。また，2005年3月23日付けで種苗法に基づき品種登録された。登録番号は第12983号である。

本品種の系統適応性検定試験（以下系適試験とする）を実施した場所は第1表のとおり

である。また，育成担当者は以下のとおりである。

育成担当者：一瀬 至（1976年4月～1983年3月），森田 昭（1976年4月～1985年3月），橋本基之（1976年4月～1977年3月，1986年4月～1989年3月），寺井理治（1977年4月～1986年3月，1998年4月～2002年3月），浅田謙介（1983年4月～1985年3月，1988年4月～1994年3月），吉田俊雄（1985年4月～1988年3月），中尾 敬（1985年4月～1992年3月），富永由紀子（1989年4月～1993年3月），長門 潤（1992年4月～1997年3月），稗圃直史（1993年4月～2002年3月），佐藤義彦（1994年4月～1998年3月），福田伸二（1997年4月～2002年3月）

## 特 性

### 1. 形態的特性

種苗法に基づく品種登録のための特性調査基準に用いられている種苗特性分類調査報告書（ビワ）（長崎県果樹試験場，1980）に従い，‘麗月’の形態的特性を‘広東’および‘長崎早生’を対照品種として育成地において調査した結果を第2表に示した。主な特性は以下のとおりである。なお，果実形質等の栽培的特性は後述するため，ここでは割愛した。

樹姿は直立で樹勢は強である。枝梢の太さは太である。葉縁鋸歯の密度は中，葉縁鋸歯の角度は鈍である。葉の大きさは大で‘長崎早生’より大きい。葉色は淡緑である。

花穂の大きさおよび小花こうの長さはともに中で，‘広東’および‘長崎早生’よりもそれぞれ大きく，長い。花の大きさは大で，‘広東’および‘長崎早生’よりも大きい。花卉の色は黄白で，一花穂当たりの花数は中である。

種子数は多で種子背面の形は短楕円形である。種子の大きさは大で，色は褐，種皮小斑点の多少は少である。

発芽期は中で、開花期はやや早である。また、成熟期は早である。結果性（結果樹齢到達の早晚）は中である。幼果の耐寒性は弱で、がんしゅ病抵抗性はやや強である。

‘広東’とは樹姿が直立であること、成熟期が早いこと、果実の大きさが大きいことなどで区別される。また、‘長崎早生’とは果実縦断面が円であること、果皮の色および果肉の色がともに黄白であることなどで区別性がある。

## 2. 栽培的特性

‘麗月’の栽培的特性は第1表に示した試験研究機関において育成系統適応性検定試験・特性検定試験調査方法(農林水産省果樹試験場, 1994)に従い、調査が行われた。

### 1) 育成地における特性

育成地では露地栽培および施設栽培の両方で特性調査を行ったが、‘麗月’は施設栽培用品種であることから、1998年から2001年までの4年間にわたって長崎県における‘長崎早生’の一般型加温体系(長崎県農産園芸課, 2004)で施設栽培を行った結果を第3表に示した。対照品種として成熟期がほぼ同時期である‘長崎早生’を供試した。樹勢は‘長崎早生’と同様に強かった。成熟期は4月中旬～5月上旬で平均すると4月下旬であったが、‘長崎早生’より若干遅かった。‘長崎早生’に比べると隔年結果性が強い傾向が認められたが、1樹当たり収量の4年間の平均は‘長崎早生’より多かった。果実の大きさは平均51gで、‘長崎早生’よりも大きかった。果皮色は黄白色であった。果肉は黄白色を呈し、ち密で軟らかく、また、糖度は平均14.1%と極めて高く、食味が非常に優れていた。酸含量は‘長崎早生’より若干高かった。そばかす症が若干発生したが、果皮障害の発生は概ね少なく、外観は良好であった。

### 2) 系適試験地における特性

系適試験において施設栽培下で試験を行っ

たのは千葉県農業総合研究センター暖地園芸研究所(以下、千葉と省略)、長崎県果樹試験場(以下、長崎と省略)および熊本県農業研究センター天草農業研究所(以下、熊本と省略)の3場所のみであったため、これらの3場所の2001年の試験結果を第4表に示した。

樹姿は熊本では直立性と開張性の中間であったが、千葉および長崎では直立性を示した。樹勢はいずれの場所でも強く、長崎および熊本では‘長崎早生’と同等か、より強かった。枝の発生密度については3場所ともに中程度との評価であった。出らい期は千葉で9月中旬、長崎および熊本では10月上旬であった。また、満開期は千葉で11月下旬、長崎および熊本では12月上旬であった。長崎および熊本では‘長崎早生’に比べると出らい期、満開期ともに遅かった。

成熟期は地域により異なり、長崎では4月中旬、熊本では4月下旬、また、千葉では5月上旬であった。長崎および熊本では‘長崎早生’よりも若干遅く成熟すると評価された。果皮の色は千葉では淡橙黄、長崎および熊本では黄白であった。果実の大きさはいずれの場所でも50gを超え、長崎および熊本では‘長崎早生’よりも大きかった。果実の形は側面の形が千葉では扁円、長崎および熊本では円で、上面の形は千葉ではやや角、長崎および熊本では円であった。

はく皮は熊本では中程度であったが、千葉および長崎では容易との評価であった。果肉色は千葉では黄、長崎および熊本では黄白であった。果肉の厚さは8.4～8.7mmで場所間のばらつきは小さかった。果肉の密度は千葉ではやや密、長崎は密、熊本は中と場所間で評価が異なった。果肉硬度については千葉および長崎ともに軟で、熊本においては硬度計値が対照品種よりも小さく、いずれの試験地でも対照品種よりも軟らかいとの評価であった。食味は3場所とも良またはやや良であり、高い評価であった。糖度は千葉および長崎では1

4%台と高く、さらに熊本では16.7%と極めて高かった。いずれの場所でも対照品種を上回っていた。酸含量は千葉では0.14g/100mlと低かったが、長崎および熊本では0.32~0.35g/100mlと比較的高かった。

果皮障害は千葉でそばかす症および緑斑症の軽度の発生が、また、長崎でもそばかす症の軽度の発生が認められたが、その他の障害に関しては発生が認められず、全体的に果皮障害が少なかった。

露地栽培における試験結果を第5表に示した。ただし、和歌山県農林水産総合技術センター果樹試験場については調査項目がごくわずかであったため、割愛した。樹姿および樹勢は施設栽培と同様の特性を示したが、枝の発生密度は中または粗で、施設栽培に比べて少ないとの評価が多かった。成熟期は長崎では5月下旬、四国地方では6月上旬であった。果皮の色、果実の形、はく皮の難易および果肉の色は施設栽培の試験地の評価と概ね同様であった。しかし、果実の大きさは施設栽培よりも小さく、また、果肉の厚さも施設栽培より薄かった。一方、果肉の密度および果肉硬度は施設栽培と同様に密で軟らかく、食味も同様に良好との評価であった。糖度も施設栽培と同様に高かった。酸含量は0.15~0.35g/100mlで、施設栽培と同様に場所によるばらつきが大きかった。果皮障害ではへそ黒症および裂果は施設栽培と同様に発生が認められなかったが、緑斑症については場所により認められた。一方、そばかす症については、施設栽培では千葉および長崎で軽度の発生が認められたのみであったが、露地栽培では4場所全てで認められ、その程度も施設栽培の試験地よりも明らかに大きかった。さらに、施設栽培では発生しなかった紫斑症が徳島および長崎で認められた。以上のように、露地栽培では施設栽培に比べて果実は小果で果皮障害の発生が多い傾向が認められた。

### 3. 栽培適地

‘麗月’は露地栽培では寒害を受けやすいため、栽培適地は極めて温暖な地域に限られる。また、果皮障害が発生しやすく高品質果実の生産が困難である。したがって、本品種は施設栽培に適した品種であり、千葉県、九州地方ともに施設栽培で優秀性が認められたため、施設栽培であれば全国のビワ栽培地域で栽培が可能である。特に、外観良好で、品質が優れていることから、高級果実の生産を目指す産地において、その特性が十分発揮されるものと思われる。

### 4. 栽培上の留意点

‘麗月’は施設栽培の主要品種である‘長崎早生’に比べ樹勢が強く枝の発生が少ないので、枝が長く伸びやすい。したがって、樹冠拡大が早い反面、樹冠内部では結果枝が少なくなりやすい。そのため、2~3年生の直立した枝を水平近くまで誘引して不定芽の発生を促し樹冠内部に結果枝を確保する必要がある。不定芽が多く発生した場合は枝の上面から発生した枝は直立枝となり強勢になりやすいため、芽かきして枝の側面から発生した不定芽を残す。また、若齡樹では着花性が劣るので、誘引により着花の確保を図る必要がある。

## 謝 辞

本品種の育成にあたり、系統適応性検定試験を担当された関係公設試験研究機関の担当者各位、並びに多年にわたり実生育成、特性調査等に多大なご協力を寄せられた長崎県果樹試験場の歴代職員、特に圃場管理担当農事員の方々に心から謝意を表する。

## 摘 要

長崎県果樹試験場では、1973年から農林水産省指定試験事業のびわ育種指定試験地としてビワの育種を開始し、2005年に早生種の‘麗

月’を育成した。‘麗月’は1976年に‘森尾早生’に‘広東’を交雑して得た実生の中から選抜された。1996年からビワ第2回系統適応性検定試験に‘ビワ長崎7号’の系統番号を付して施設栽培用系統としての特性を検討した結果、施設栽培に適した品質優秀な早生種であることが確認され、2002年9月3日に‘麗月’と命名され「びわ農林4号」として登録された。また、種苗法に基づき2005年3月23日付けで登録番号第12983号として品種登録された。施設栽培における特性は以下のとおりである。

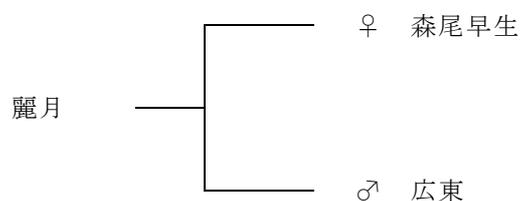
- 1) ‘長崎早生’の一般型加温栽培体系で施設栽培を行った場合、育成地の長崎県大村市では4月下旬に成熟し、成熟期は同じ早生種の‘長崎早生’より若干遅い。
- 2) 樹姿は直立性で樹勢は強い。枝は太く、その発生は中である。満開期は11月下旬から12月上旬で、‘長崎早生’より若干遅い。がんしゅ病には比較的強い。
- 3) 果実の大きさは平均51gで、‘長崎早生’よりも大きい。果実縦断面の形は円形から扁円形、横断面は円形である。果皮色は黄白色である。はく皮性は良好である。そばかす症が若干発生するが、果皮障害の発生は少なく外観は良好である。果肉は黄白色

を呈し、ち密で軟らかく、糖度は平均14.1%と極めて高く食味が非常に優れている。

## 引用文献

- 一瀬 至・村松久雄・浜口克己・寺井理治・池田丈助・浅田謙介・橋本基之. 1982. ビワ新品種「白茂木」について. 園学要旨. 昭57春: 58-59.
- 長崎県果樹試験場. 1980. 昭和54年度種苗分類特性調査報告書(ビワ). 1-203.
- 長崎県農産園芸課. 2004. 施設果樹栽培のてびき. 69-103.
- 農林水産省果樹試験場. 1994年. 育成系統適応性検定試験・特性検定試験調査方法. 30-41.
- 村松久雄・一瀬 至・浅田謙介・池田正之・池田丈助. 1976. ビワ新品種‘長崎早生’について. 園学要旨. 昭51春: 144-145.
- 根角博久・寺井理治・稗圃直史・福田伸二・富永由紀子. 2006. ビワ新品種‘涼峰’の特性. 園学雑. 75別1: 44.
- 寺井理治・一瀬 至・浅田謙介・橋本基之・森田 昭・中尾 敬・吉田俊雄・富永由紀子・佐藤義彦・長門 潤・稗圃直史. 2001. ビワの新品種‘涼風’, ‘陽玉’. 長崎果樹試研報. 8: 45-59.

ビワ新品種‘麗月’



第1図 ‘麗月’の系統図

第1表 ビワ第2回系統適応性検定試験において‘麗月’の地域適応性を検討した試験地

試験研究機関	所在地	栽培方法
千葉県農業総合研究センター暖地園芸研究所	千葉県館山市	施設
和歌山県農林水産総合技術センター果樹試験場	和歌山県有田郡有田川町	露地
徳島県立農林水産総合技術支援センター果樹研究所	徳島県板野郡上板町	露地
香川県農業試験場府中分場	香川県坂出市	露地
愛媛県立果樹試験場	愛媛県松山市	露地
長崎県果樹試験場	長崎県大村市	露地, 施設
熊本県農業研究センター天草農業研究所	熊本県天草市	施設
鹿児島県農業開発総合センター	鹿児島県垂水市	露地

第2表 ‘麗月’の形態的特性

形質区分	麗月	広東	長崎早生
樹姿	直立	やや開張	やや直立
樹の大きさ	大	中	大
樹勢	強	中	強
枝梢の太さ	太	太	中
枝梢の毛じの多少	中	中	やや多
葉身の形	中	中	広長
葉身先端の形	中	やや鈍	中
葉縁鋸歯の密度	中	小	中
葉縁鋸歯の角度	鈍	やや鈍	中
葉の横断面	平	やや内	平
葉の厚さ	厚	中	中
葉の大きさ	大	大	中
葉色	淡緑	淡緑	やや淡緑
葉の網脈の明瞭さ	中	明瞭	中
幼葉面の毛じょう	中	中	中
成葉裏面の毛じょう	中	中	中
花穂の形	中	中	中
花穂の大きさ(長さ)	中	短	短
小花こう(側軸)の着生方向	中	やや下	中
小花こう(側軸)の長さ	中	短	短
花の大きさ	大	中	小
花卉の色	黄白	やや白	黄白
花数(一花穂花数)	中	中	中
果実縦断面	円	円	短卵
果実横断面	円	円	やや角
果実の果梗部の形	円	円	鈍
果実の大きさ	中	小	中
果皮の色	黄白	黄白	橙黄
果実の紫斑	無	無	無
果実の緑斑	無	無	無
果実のそばかす	軽	軽	軽
果粉の多少	多	やや少	多

ビワ新品種‘麗月’

(第2表 つづき)

形質区分	麗月	広東	長崎早生
果頂部の開孔	やや開	やや開	開
果頂部の突出度	平	凹	やや凹
がく片の長さ	中	中	小
がく片の基部の幅	狭	中	中
がく筒果しんの幅	広	中	中
がく筒の深さ	深	浅	中
果皮の厚さ	厚	厚	薄
はく皮の難易	易	中	易
果肉の厚さ	中	中	中
果肉の色	黄白	白	橙
果肉の粗密	密	密	密
果肉の硬度	軟	軟	やや軟
甘味	やや多	多	中
酸味	多	多	少
果汁の多少	中	中	やや多
香気	少	少	多
種子数	多	中	中
種子背面の形	短楕円	円	長楕円
種子横断面の形	扇	やや広扇	扇
種子の大きさ	大	小	中
種子の色	褐	淡褐	黒褐
種皮小斑点の多少	少	少	やや多
発芽期	中	中	中
開花期	やや早	中	やや早
開花期間	中	やや短	中
成熟期	早	やや晩	早
果房内の着色の揃い	良	良	やや良
一樹内の熟期の幅	中	中	やや長
結果性(結果樹齢到達の早晚)	中	中	早
耐寒性	弱	中	やや弱
がんしゅ病抵抗性	やや強	やや強	弱

第3表 ‘麗月’の施設栽培における栽培的特性の‘長崎早生’との比較 (長崎県果樹試験場)

年次	樹勢	成熟期 (月.日)	収量 (kg)/樹	果実重 (g)	果肉密度	果皮の色	果肉の色	糖度 (%)	酸含量 (g/100ml)	食味	果実の障害	
											そばかす症	紫斑症
<u>麗月</u>												
1998年(3) <sup>2</sup>	強	5.9	1.6	48	密	黄白	黄白	14.6	0.26	やや良	中	無
1999年(4)	強	5.2	5.6	50	密	黄白	黄白	13.9	0.26	やや良	軽	無
2000年(5)	強	5.4	2.6	54	密	黄白	黄白	13.9	0.21	良	軽	無
2001年(6)	強	4.14	11.0	52	密	黄白	黄白	14.0	0.32	やや良	軽	無
平均	強	4.30	5.2	51	密	黄白	黄白	14.1	0.26	やや良～良	軽	無
<u>長崎早生</u>												
1998年(3)	強	5.8	2.2	41	密	橙黄	橙黄	12.9	0.23	やや良	軽	無
1999年(4)	強	5.1	5.0	42	中	橙黄	橙黄	11.5	0.23	中	軽	無
2000年(5)	強	5.2	4.1	45	中	橙黄	橙黄	12.8	0.21	やや良	軽	無
2001年(6)	強	4.11	5.9	44	中	橙黄	橙黄	13.9	0.26	やや良	軽	無
平均	強	4.28	4.3	43	中	橙黄	橙黄	12.8	0.23	中～やや良	軽	無

<sup>2</sup> ( ) 内の数字は高接ぎの樹齢を示す。

第4表 施設栽培における‘麗月’の栽培的特性(2001年)

試験地	品種	樹姿	樹勢	枝の発生密度	出らい期	満開期
千葉	麗月	直立性	強	中	9月15日	11月23日
	房光	開張性	中	中	9月19日	12月6日
長崎	麗月	直立性	強	中	10月1日	12月3日
	長崎早生	直立性	強	中	9月26日	11月29日
	茂木	直立性	強	中	10月11日	12月25日
熊本	麗月	中間	強	中	10月7日	12月6日
	長崎早生	直立性	やや強	密	9月15日	11月22日
	涼風	中間	強	密	9月25日	12月3日
	陽玉	中間	強	やや密	9月27日	12月12日

(第4表 つづき)

試験地	品種	成熟期	果皮の色	果実重 (g)	果実の形	
					側面の形	上面の形
千葉	麗月	5月9日	淡橙黄	51	扁円	やや角
	房光	5月19日	濃橙黄	62	短卵	角
長崎	麗月	4月14日	黄白	52	円	円
	長崎早生	4月11日	橙黄	44	長卵	円
	茂木	4月25日	橙黄	43	長卵	やや角
熊本	麗月	4月25日	黄白	53	円	円
	長崎早生	4月21日	橙黄	51	長卵	やや角
	涼風	4月25日	橙	61	長卵	角
	陽玉	5月1日	橙	86	長卵	円

ビワ新品種‘麗月’

(第4表 つづき)

試験地	品種	はく皮の難易	果肉の色	果肉の厚さ(mm)	果肉の密度	果肉硬度	食味	糖度(%)	酸含量(g/100ml)
千葉	麗月	易	黄	8.7	やや密	軟	良	14.4	0.14
	房光	易	橙黄	10.0	密	やや軟	やや良	12.5	0.30
長崎	麗月	易	黄白	8.5	密	軟	やや良	14.0	0.32
	長崎早生	易	橙黄	8.3	中	中	やや良	13.9	0.26
	茂木	易	橙黄	8.2	中	やや硬	やや不良	12.2	0.27
熊本	麗月	中	黄白	8.4	中	410	良	16.7	0.35
	長崎早生	中	橙	8.6	密	450	良	13.9	0.36
	涼風	中	橙	8.3	密	457	中	12.5	0.41
	陽玉	易	橙	10.0	密	432	中	10.6	0.40

(第4表 つづき)

試験地	品種	へそ黒症	そばかす症	裂果	紫斑症	緑斑症
千葉	麗月	無	微	無	無	微
	房光	無	微	無	無	無
長崎	麗月	無	軽	無	無	無
	長崎早生	軽	軽	無	無	無
	茂木	中	無	無	中	無
熊本	麗月	無	無	無	無	無
	長崎早生	無	無	無	無	無
	涼風	無	無	無	軽	無
	陽玉	無	無	無	中	中

第5表 露地栽培における‘麗月’の栽培的特性(2001年)

試験地	樹姿	樹勢	枝の発生密度	出らい期	満開期
徳島	中間	やや強	—	—	—
香川	直立性	強	粗	—	11月26日
愛媛	直立性	中	中	—	—
長崎	直立性	強	粗	9月27日	11月16日

(第5表 つづき)

試験地	成熟期	果皮の色	果実重(g)	果実の形	
				側面の形	上面の形
徳島	6月5日	黄白	37	円	円
香川	6月4日	黄白	23	円	円
愛媛	6月6日	黄白	41	扁円～短卵	やや角
長崎	5月23日	黄白	47	円	円

(第5表 つづき)

試験地	はく皮 の難易	果肉の色	果肉の 厚さ (mm)	果肉の 密度	果肉 硬度	食味	糖度 (%)	酸含量 (g/100ml)
徳島	易	黄白	6.7	密	軟	良	16.1	0.25
香川	易	黄白	5.5	密	軟	良	14.2	0.35
愛媛	易	黄白	7.8	密	軟	やや良	15.4	0.15
長崎	易	黄白	7.9	密	軟	やや良	14.9	0.33

(第5表 つづき)

試験地	へそ黒症	そばかす症	裂果	紫斑症	緑斑症
徳島	無	軽	無	微	無
香川	無	中	無	無	無
愛媛	無	中	無	無	無
長崎	無	甚	無	軽	軽

ビワ新品種「麗月」



写真1 樹姿



写真2 着果状況

Bull. Nagasaki Fruit Tree Exp. Stn. 10:1-13. 2007.

## New Loquat Cultivar ‘Reigetsu’

Osamu TERAI, Naofumi HIEHATA, Shinji FUKUDA, Jun NAGATO, Yoshihiko SATO,  
Kensuke ASADA, Akira MORITA, Takashi NAKAO, Yukiko TOMINAGA, Itaru ICHINOSE,  
Toshio YOSHIDA and Motoyuki HASHIMOTO

*Nagasaki Fruit Tree Experiment Station, 1370 Onibashi-cho, Omura, Nagasaki, 856-0021, Japan*

### Summary

‘Reigetsu’ is a new early-maturing loquat cultivar (*Eriobotrya japonica* Lindl.) released from Nagasaki Fruit Tree Experiment Station in 2005, as a result of the Special Assignment Loquat Breeding Program performing since 1973 by MAFF of Japan. It was selected from seedlings produced in 1976 by crossing between ‘Moriowase’ and ‘Guangdong’. Then it has been examined at eight prefectural experiment stations as ‘Biwa Nagasaki No.7’ in the second local adaptability test of loquat from 1996 to 2001. As a result, it was held a superior early-maturing cultivar with excellent quality where it was cultivating under heated plastic house against frost damage of young fruits. It was named ‘Reigetsu’ and registered to MAFF as ‘Biwa Norin No. 4’ on September 3, 2002. It was also registered as No.12983, under the Seeds and Seedlings Law of Japan on March 23, 2005.

The trees of ‘Reigetsu’ have an upright form and grow vigorously. The shoots are thick and sprout moderate density. Degree of resistance against loquat canker (*Pseudomonas syringae* pv. *eriobotryae*) is relative high. The full bloom stage is observed from late November to early December in Omura, Nagasaki, a little later than that of ‘Nagasakiwase’.

The fruits of ‘Reigetsu’ mature in late April, a little later than ‘Nagasakiwase’, where they were grown under heated plastic house from mid-December in Omura, Nagasaki. The fruit weight is 51g on an average, a little heavier than ‘Nagasakiwase’. The fruit shape is round or oblate in longitudinal section and round in cross section. The pericarp is yellowish white in color and easy to peel. Disorders on pericarp occur slightly. The flesh is yellowish white in color, soft and fine in texture. The sugar content of juice is very high at 14.1% on an average and the taste is excellent.